

マツダが語る 「匠塗」の神髄とは



2022年12月、MAZDA6の改良に合わせ、特別仕様車「20th Anniversary edition」の専用色として設定された、アーティザンレッドプレミアムメタリック（51F）。マツダ独自の塗装技術「匠塗（TAKUMINURI）」による特別塗装色の第5弾であり、2012年のソウルレッドプレミアムメタリック（41V）の登場からちょうど10年の節目に発表された新色となる。匠塗の開発経緯や進化について、マツダのデザイン本部 岡本圭一、技術本部 河瀬英一の両氏、補修塗装分野でのサポート体制をカスタマーサービス本部 米内山晃一、西口彰一、高橋守の各氏から話を聞いた。

デザイン本部



シニアクリエイティブ
エキスパート
岡本 圭一氏

技術本部車両技術部
塗装技術グループ



マネージャー
河瀬 英一氏

カスタマーサービス本部
商品サービスプログラム部商品サービスプログラムグループ



アシスタントマネージャー
米内山 晃一氏



アシスタントマネージャー
西口 彰一氏



高橋 守氏

匠塗の スタート地点である、 魂動デザインと 匠塗の関係

岡本 マツダの匠塗は、2012年に第1弾となるソウルレッドプレミアムメタリック（以下、ソウルレッド）を発表しましたが、マツダの製品を象徴し、一目でマツダ車だと分かる色をぜひ創りたいという想いで開発をスタートさせました。ふと気がつけば第1弾の開発から10年以上が経ち、昨年発表した第5弾まで匠塗の開発が進められるとは、当初想像すらしていません

でした。

ソウルレッドの開発を始めた2010年ごろのマツダでは、デザインによってブランド価値を生み出す、ブランドデザイン戦略に着手していました。その中で、マツダとしてのブランド価値の創造には、強烈な個性を持つデザインテーマと、一貫性・継続性を持ったデザイン戦略が必要でした。

そこで生まれたのが、「魂動デザイン」です。車のキャラクターラインによって躍動感を演出する造形で、折れ線などを巧みに使いながら表現していたのが、最初の魂動デザインの造形テーマでした。このテーマは後に変化し、第3弾の匠塗開発へとつながって



魂動デザイン初のコンセプトカーとなる鞠（SHINARI）（上）。同デザインを反映した最初の市販モデルが2011年のCX-5（下）

ロジウムホワイト プレミアムメタリック (51K)

カラーベースもさることながらメタリックベースが高希釈のため、あらかじめ塗装プランを練っておかないと非常にムラになりやすい同色。「ブロック塗装と比較しボカシの難易度が格段に高い」と現場での声は一致していた。アルミフレークの並びによってパネルごとに違う色味となりやすく、静電気などによってパネル際にアルミが偏ってしまう。そのため、静電気除去ガンを使用して静電気をコートごとに除去するなど、塗装状況によってガン設定やシンナーの希釈率を調整しながらの塗装が必要となるだろう。

補修塗膜構成例

第3層 トップコートクリアー
第2層 カラーメタリックベース
第1層 カラーベース
下地 (プラサフ、旧塗膜)

新車塗膜構成

クリアー層 (透明)
反射層 極薄高輝度アルミフレーク (1層)、白顔料 (少量)
発色 (カラー) 層 白顔料
ボデー

カラー層

ブロック塗装

カラーベースは他色と同様に下地を隠すまで塗面の平滑性を意識し、ウエットになり過ぎないように塗っていく。溶剤系塗料の場合、シンナーの希釈率を高くする。乾燥時間が足りていないと、次工程のメタリックベースでメタリック顔料が沈み込み平滑に並びにくくなってしまいうため注意する。

メタリックベースでは薄く密にメタリックを並べていくイメージで実車の色相と合うように塗り重ねる。ガン距離を確保しストロークを遅めに取ることで、パターンの重なりを十分に詰めてムラ取りのように塗装する。ムラやゴミ・ブツなどの塗膜不良が生じてしまうとメタリックベースだけでカバーしきれないため、カラーベースからの

塗り直しとなる。また塗り重ね過ぎると、アルミフレークが平滑に並んでいないとしても、シェードの影が強くなり白色が濃く見えてしまう。トップコートは厚塗りを避ける。

ボカシ塗装

色決め部から少しずつ広げるようにボカシ際に向かって塗装箇所を広げていく。この時の乾燥ではボカシ際のミストが充分乾燥してから、強制乾燥に入るほうが良い。

その後、ニゴシ塗装などのボカシ調整を旧塗膜部まで加え、なだらかな塗膜を作っていく。溶剤系塗料の場合、乾燥が少し遅くなるようにシンナーを調整し、際の色差が落ち着いたのを確認してから次の作業に移行すると、ムラが出にくい。この際にボカシの跡が

残っていると、最終仕上がりまで残る可能性が高いのでなだらかな肌を意識する。

メタリックベースでは吐出量を絞リガン距離を離すことでミストコートを心掛け、一度の塗り込み量を少なくする。塗装範囲をマスキングテープであらかじめマークしておくのも有効だろう。パネルの縁に塗料が溜まるのを防ぐためにも、1コートごとに塗装範囲が不必要に被らないようにする。

原色の追加

匠塗に対して、赤ないしはカラークリアーとメタリック原色を新しく追加している塗料メーカーが多いため、TDSや各社の配合データを確認して調色したい。また、51Kでは着色力の弱い原色やマルチ原色が使われていることがあり、慎重な調色が求められる。